

# ヨエル書とラオデキアのセブンスデー・アドベンチスト教会-その十一

Jeff Pippenger

2025-12-14

## 十一番

後の雨のメッセージは、個人的な備えへの呼びかけと相まって、恩恵期間の終結が近づいているという警告である。これら二つの概念はイザヤ書10章と11章において表されており、しかもそれは、1989年に封印が解かれたダニエル書11章のメッセージの文脈において、そしてその隠された歴史が、幻の中でイザヤとその子らによって表されている十四万四千人の封印の時期に解き明かされるという文脈において、なされている。この二つの流れは合わせてアハズへの警告を表しており、アハズは、聖書の預言全体に行き渡っているこの内的・外的という二つの流れに「理解」を持たないラオデキヤ人を表している。

ダニエル書11章11節と黙示録11章11節は、ダニエル書が外的を、黙示録が内的を表すという点で、同じ内的・外的な表現を示している。これら二つの内的・外的な「章と節」は、10章と11章の外的・内的メッセージと直接結びついており、それはイザヤ書11章11節において見られる。

イザヤ書6章は9/11を指し、イザヤが9/11において使者として清められ、油注がれることを示している。7章以降は、9/11に到来したメッセージの概要である。10章は、1989年の終わりの時に封印が解かれたメッセージであるダニエル書11章の最後の6節の役割を明らかにしている。

イザヤ書第十一章は、9/11と、イザヤへの油注ぎおよび彼のメッセージを象徴している。第一節は「Jessie」によって第十節と結び付けられており、十節には「その日」とあり、十一節はさらに「その日に、主は再び（二度目に）御手を伸ばして、ご自分の民の残りの者を取り戻される」と続く。

その日は1850年のことだった。

エッサイの切り株から一つの芽が生え、その根から一つの若枝が伸び出る。主の霊がその上にとどまる。知恵と悟りの霊、助言と力の霊、知識と主を恐れる霊。彼を主を恐れることにおいて鋭敏にし、彼は目に見えるところによっては裁かず、耳に聞こえるところによっては戒めない。しかし、義をもって貧しい者を裁き、公平をもって地のへりくだる者のために正し、口の杖で地を打ち、唇の息吹で悪しき者を殺す。義は彼の腰の帯となり、誠実はその身の帯となる。狼は小羊とともに住み、豹は子やぎとともに伏し、子牛と若獅子と肥えた家畜がともにいて、幼い子どもがそれらを導く。雌牛と雌熊はともに草をはみ、その子らは共に伏し、獅子は牛のようにわらを食べる。乳飲み子は毒蛇の穴の上で遊び、乳離れた子はまむしの巣に手を伸ばす。わたしの聖なる山のすべての所で、彼らは害を与えず、滅ぼすこともない。主を知る知識が、海をおおう水のように地を満たすからである。

11:10 その日、エッサイの根が現れ、民の旗印として立ち、異邦人はそれを尋ね求め、その憩いの所は栄光に輝く。

11:11 その日、主は二度目に御手を伸ばして、アッシリア、エジプト、パトロス、クシュ、エラム、シヌアル、ハマテ、そして海の島々から、残っているご自分の民の残りの者を取り戻される。

11:12 そして彼は諸国の民のために旗印を掲げ、イスラエルの追い出された者たちを集め、地の四方からユダの散らされた者たちをひとつに集める。

また、エフライムのねたみは去り、ユダの敵は断たれる。エフライムはユダをねたまず、ユダもエフライムを悩ますことはない。しかし、彼らは西に向かってペリシテ人の肩に襲いかかり、共に東の民を略奪する。彼らはエドムとモアブに手を伸ばし、アンモンの子らは彼らに従う。

主はエジプトの海の入り江をことごとく滅ぼし、その力強い風をもって川の上に御手を振り、それを七つの流れに打ち分け、人々を濡れずに渡らせる。また、アッシリアから残されたその民の残りの者のために大路が設けられる。ちょうど、イスラエルがエジプトの地から上って来た日にそうであったように。イザヤ書 11:1-16.

第一節にはこうある。「エッサイの株から一本の若枝が出、その根から一つの枝が育つ。主の霊が彼の上にとどまる。」キリストについての力強い描写はさらに続く。しかし、その描写が当てはまるのは、イザヤの時代や、キリストが人々の間を歩まれた時代よりも、むしろ終わりの日々である。

注意深く読むと、1節から9節はすべてキリストを指し示す特徴であり、10節では「そして一本の枝が生えてくる」と述べられている。1節から10節に至るまで、思考の流れには途切れがない。10節は「その日には」と述べており、それは1節と同じ日に起こるはずのことである。10節と1節はいずれも「根」を示しており、そのことによって両節は行に行を重ねるように結び付けられている。

1節と10節を合わせると、次のように述べている。「エッサイの幹から芽ばえが生じ、その根から若枝が伸びる。その日には、エッサイの根が民の旗印として立ち、異邦人はこれを求め、その憩いは栄光に満ちる。」

「杖」は権威の象徴である。

そして彼女は男の子を産んだ。その子は鉄のつえであらゆる国々を治めるべき者であった。彼女の子は神のもと、その御座へ引き上げられた。黙示録 12:5

「棒」は選択、分割、分離の象徴である。

モーセは証の幕屋で主の御前に杖をすべて納めた。翌日、モーセが証の幕屋に入ると、見よ、レビの家のアロンの杖は芽生え、つぼみを出し、花を咲かせ、アーモンドの実を結んでいた。そこでモーセは主の御前からすべての杖を取り出し、イスラエルのすべての子らに示した。彼らは見て、おのこの自分の杖を取った。主はモーセに言われた、「アロンの杖を再び証の前に持って行き、反逆する者たちに対するしるしとして保管せよ。そうして彼らのつぶやきをことごとくわたしから取り除き、彼らが死なな

いようにせよ。」モーセはそのとおりにした。主が彼に命じられたとおりに、彼は行った。民数記17章7-11節。

芽を出したアロンの杖は、後の雨の時期における「杖」が何であるかを示している。というのも、十三本の「杖」のうち芽を出したのはアロンのものだけだったからである。芽吹きは、神が、後の雨のメッセージを持っていると自称する十二本の反逆的な「杖」と真のものとの間に区別を現される後の雨の時期の象徴であり、これはまた、真と偽の区別を示したエリヤの火による実証にも表されている。「杖」はまた、測定と裁きの象徴でもある。

そして、杖のような葦が私に与えられた。すると天使は立って言った。「立ち上がって、神の神殿と祭壇、そしてその中で礼拝している者たちを測りなさい。」ヨハネの黙示録 11:1

「杖」はジェシーの幹から出てくるが、「ジェシー」とは、聖書の預言における道しるべがそうであるように、「目立つ」という意味である。ファレズはジェシーの実際の「根」であり、ファレズとは「破れ、突き破ること、または散らすこと」を意味する。ファレズはジェシーの血統の根、すなわち始まりである。したがって「ジェシーの根」は、始まりと終わり、すなわちアルファであるファレズとオメガであるジェシーを象徴している。ジェシーの根は、散らし（ファレズ）から始まり、立つ男という道しるべで終わる。男たちが立ち上がることは、預言的に王国を示す印である。聖書では、ファレズは登場以前に連なる系譜がないまま血統を開始し、その名も「破れ」を意味する。したがって、彼の系譜の記録とその名はファレズが始まりであることを示し、ジェシーを終わりとしている。メルキゼデクもまた、ファレズと同様に、それ以前の系譜を持たないとされる聖書の人物である。ファレズの根には、彼がアブラハムが十分の一を捧げたメルキゼデクの祭司職を表しているという真理が含まれている。

メルキゼデクの位は、キリストの祭司職である。

そこへは、私たちのために先駆者であるイエスが入り、メルキゼデクの位にしたがって永遠の大祭司となられた。ヘブル人への手紙 6:20

ジェシーの根はメルキゼデクの祭司職であり、始まりは終わりを反映していなければならない。ジェシーは、最後に立ち上がるメルキゼデクの祭司職の一団を表しており、イザヤによれば彼らは諸国民への旗印である。

「stem」は「(木を)切り倒す；(伐採された、または植えられた)木の幹または切り株」を意味し、その「stem」は、ダニエル書第4章におけるネブカドネザルがそうであったように、見過ごされた王国から生じる。木は預言的には王国であり、王国が終わると、その木は切り倒されたことになる。

この箇所「茎」は、切り株から出ており上枝からではない。切り株で表されるかつての王国から、「杖」、すなわち権威の象徴が現れ、その権威は、その「杖」が「後の雨のメッセージ」の「つぼみと花」をつけるかどうかに基づいている。その権威は、切り倒された以前の王国に由来する。

「根」は「ジェシーの根」であり、「切り株」から出る「幹」は、その根がジェシーの根である「切り株」から出てくる。権威を生み出す幹は切り株から出るが、枝は根から出る—そして根は旗印である。根が始まりであり、終わりは枝である。

「branch」という語は「見張り」または「道しるべ」を意味する。イザヤ書は、「Branch」が日曜法のとくに来ると教えている。

その日、七人の女が一人の男にすがりついて言う。「私たちは自分のパンを食べ、自分の衣を身に着けます。ただ、私たちがあなたの名で呼ばれるようにしてください。私たちのそしりを取り除くために。」その日、主の若枝は美しく栄え、地の実りはイスラエルの逃れた者たちにとって、優れて美しいものとなる。やがて、シオンに残された者、エルサレムにとどまる者は皆、聖なる者と呼ばれる。すなわち、エルサレムで生きる者のうち、名を記された者は皆そう呼ばれる。これは、主がシオンの娘たちの汚れを洗い清め、さばきの霊と焼き清める霊によって、そのただ中からエルサレムの血の汚れをすすぎ去られるときに起こる。イザヤ書 4:1-4。

七人の女がすぎる「ひとりの男」とはローマ教皇であり、日曜法のとく「七つに属する八番目」となつて、箱舟に乗つた八人を偽つて模倣する。日曜法において、「その日には」「主の若枝は美しく栄光に輝き」「主がシオンの娘たちの汚れを洗い去り、裁きの霊と焼き尽くす霊によって、その中からエルサレムの血を清められるとき」。裁きの霊と焼き尽くす霊による清めは、日曜法において、マラキ三章の契約の使者によつて成し遂げられる。「美しい若枝」とは、切り株からではなく、旗印であるジェシーの根から出てくる十四万四千人である。

彼らの権威は、没落した王国の枝から出た杖によつて象徴されている。フィラデルフィアの王国は1856年から1863年にかけて没落し、その没落した王国において確立された権威は日曜法のとくには再確立される。旗印であるその枝が掲げられるとき、十四万四千人のラオデキアの運動は、十四万四千人のフィラデルフィアの運動へと移行する。そのとき、ミレライトまたはフィラデルフィアの王国から出た権威、すなわち杖は、イザヤ書22章22節でエリヤキムの上に置かれる鍵によつて象徴される。

また、わたしはダビデの家の鍵を彼の肩に置く。彼が開ければ、閉める者はなく、彼が閉めれば、開ける者はいない。イザヤ書 22:22。

その節は1844年10月22日を指し示し、エルヤキムが「鍵」を受け取る者であることを明らかにしている。前の二つの節では、ラオデキアの権威がシェブナから取り上げられ、エルヤキムに与えられている。日曜法の時に、かつて選ばれた契約の民に与えられていた権威は、ラオデキヤ的セブンスデー・アドベンチズムの王国から取り去られ、十四万四千人のフィラデルフィア運動の王国に与えられる—それは栄光の王国である。

イエスは彼らに言われた、「では、あなたがたはわたしを誰だと言うのか。」シモン・ペテロが答えて言った、「あなたはキリスト、生ける神の子です。」イエスは彼に答えて言われた、「幸いだ、シモン・バルヨナよ。これをあなたに示したのは血肉ではなく、天にいますわたしの父である。また、わたしもあなたに言う。あなたはペテロであり、この岩の上にわたしの教会を建てよう。よみの門もこれに打ち勝つことはない。わたしは天の御国の鍵をあなたに与える。あなたが地上で縛るものは天

においても縛られ、あなたが地上で解くものは天においても解かれる。」  
マタイによる福音書 16:16-19.

ペテロに与えられた鍵として象徴される権威の杖は、イザヤ書22章22節においてエルヤキムの肩に置かれる。ペテロは、日曜法の直前にキリストと契約を結ぶ十四万四千の枝を表している。当該箇所において、ペテロはカイサリア・ピリピにあり、そこはダニエル書11章13～15節のパニウムである。彼の名は変えられ、それは契約関係を表す。また、「Peter」という名を、各文字のアルファベット順の位置を相互に乗ずる方法で扱うと、十四万四千に等しくなる。シェブナが球のように野に投げ込まれるとき、エルヤキムの肩に置かれるその権威、すなわち杖、すなわち鍵は、1856年から1863年に至るまで伐り倒されたフィラデルフィア期ミラー派アドベンティズムの切り株から出る「杖」である。

ペテロは、麦と毒麦が分けられる時に、神の契約の民の権威を受けている。というのも、麦は五旬祭の揺り動かす供えのパンとして高く掲げられるからである。五旬祭の揺り動かす供えのパンにあるパン種が焼成の過程で取り除かれることに象徴されているように、まず毒麦が分けられる。杖または鍵の権威は、倒れた王国の切り株から来る。そして、旗印である枝はエッセイの根から出ると同時にエッセイの根そのものである。なぜなら、イエスは物事の終わりをその初めによって示すからである。根が初めであり、枝が終わりである。この預言的な適用は、キリストの時代の、また今日の、重箱の隅をつつくユダヤ人には理解できない。というのも、これは後の雨の方法論の根本原則であり、またダビデの家の鍵としても表されているからである。その鍵は、閉ざされていたダビデの家への扉を開く。その鍵は、天の聖所、すなわちダビデの家への扉を開く。1844年10月22日のアルファは、日曜法のオメガにおいて繰り返される。

ジェシーの子ダビデは、キリストの時代に難癖をつけるユダヤ人たちとのそれ以上の議論に終止符を打った一つの謎を記しており、こうしてキリストのユダヤ人への証しも終わりを告げた。

ダビデの詩。主は私の主に仰せられた。「わたしの右に座れ。わたしがあなたの敵をあなたの足台とするまで。」主はシオンからあなたの力の杖を送られる。あなたは敵のただ中で治めよ。あなたの民は、あなたの力の現れる日に、聖なる麗しさをまとして、喜んで身をささげる。暁の胎から、あなたには若さの露がある。主は誓われ、思いを変えられない。「あなたはメルキゼデクの位にしたがって、永遠の祭司である。」詩篇110:1-4.

パルモニはこの一節を詩篇110篇に置くことにしたが、この110という数は、言うまでもなく、数学の世界で特別な数として認められている数でもある。「220」の半分であり、「11」の10倍であることは、魂に「110」という数に何らかの意味があるはずだと期待させるが、実際にそうであり——その一節自体にも意味がある。それはダビデの歌であり、ダビデは十四万四千人の象徴である。したがって、それはぶどう園の歌、すなわちモーセと小羊の歌からの一節である。これは、ぶどう園のかつての農夫たちが退けられ、ぶどう園が十四万四千人に与えられる時を示している。それが起こるとき、それは「あなたの力の日」であり、ペンテコステの季節の頂点においてペンテコステの力と一致する。

神の民は、「暁の胎」から出て「あなたの若さの露」を帯びて来るその日に、「進んで」身をささげるようになる。新生は、回心といのちの譬えである。2023年7月、十四万四千人は胎から取り上げられ、彼らは自らの若さの露を帯びて生まれた。というのも、彼らは「真夜中の叫び」のメッセージのうちに生まれ出たからであり、それは初め、すなわち彼らの「若さ」の時に、ミラー派にも起こったことである。それは同じ露である。というのも、これはオメガの歴史の中におけるアルファの歴史の反復だからである。「彼らが」「力を与えられる」日に、シェブナがその「職」から「追い出され」、その「地位」から（「エリヤキム」により）「引き降ろされ」るとき、十四万四千人はオメガの祭司とされる。彼らはメルキゼデクの位にしたがって立てられるからである。十四万四千人は死を味わうことがなく、メルキゼデクと同様、永遠に祭司である。

「その『御力の日』に、主は『御力の杖をシオンから』遣わされる。恵み（義認）と栄光（聖化）という二つの御国の権威は、彼の栄光の冠を戴く者たちに与えられている。彼らはその御国を代表するからである。彼らはシオンから遣わされる。というのも、『シオン』という語の意味は十四万四千人の旗印を表しているからである。」

パリサイ人たちが集まっていたとき、イエスは彼らに尋ねた。「キリストについてあなたがたはどう思うか。彼はだれの子か」。彼らは彼に言った。「ダビデの子です」。

彼は彼らに言った。「では、ダビデは霊によってどのように彼を主と呼んでいるのか。『主はわが主に言われた。「わたしの右に座していなさい。わたしがあなたの敵をあなたの足台とするまで。」』と。もしダビデが彼を主と呼んでいるのなら、どうして彼がダビデの子であり得ようか。」

そして、彼に一言も答えることができた者はだれもおらず、その日以来、あえて彼にこれ以上質問する者もいなかった。マタイ 24:41-46。

ダビデとキリストとの、アルファとオメガ-始めと終わり-という観点における預言的関係は、「行に行を重ねる」方法論の根本規則であり、その規則は、枝葉末節にこだわるユダヤ人には到底理解しえなかったのだが、それは、ラオデキア的なセブンスデー・アドベンチストが、真夜中の叫びのメッセージの時期におけるミラー派の歴史こそが、アドベンチズムの草創期に天の露が注がれた舞台であったことを理解できないのと同様である。「あなたの若さの露」は十四万四千人の上であり、それは9/11に降り始め、日曜法は「力の日」であり、その時、残りの民はメルキゼデクの位にしたがう祭司として油注がれる。

ラオデキア的なセブンスデー・アドベンチズム（戦う教会）の切り株からは枝（凱旋の教会）が生え出て、一方、エッセイの根からは、十四万四千人が、彼の力の現れる日に、揺り動かしてささげられる栄光の実の枝として、高く掲げられる。

これらの考察は次回の記事で続けます。

ことわざ一

1850年4月1日 『小さな群れ』へ。

親愛なる兄弟たちへ——1月26日に主が私に一つの幻をお与えになり、それをお話します。私は、神の民の中には愚かで眠りこけ、半ばしか目を覚ましておらず、いま私たちがどのような時に生きているのかを悟っていない者がいるのを見ました。そして『ちり払いの刷毛』を持った『男』が入って来ており、幾人かは掃き払われる危険にさらされていました。私はイエスに、彼らをお救いになり、もう少しの間彼らに猶予を与え、その恐るべき危険を見させ、永遠に手遅れになってしまう前に備えることができるようにしてくださるよう、切に願いました。天使は言いました。「滅びは力強いつむじ風のようにやって来る。」私は天使に、世を愛し、所有に執着し、それらから手を切ってささげ、使者たちが霊的な食物の欠乏のために滅びつつある飢えた羊に糧を与えるべく速やかに赴くのを助けることをしようとしないうちを、憐れみ、救ってくださるようお願いしました。

私は、現在の真理を欠いて死にゆく哀れな魂たちと、真理を信じると公言しながらも、神の業を前進させるために必要な手段を差し控えて彼らを死なせている者たちを見た。その光景はあまりにも痛ましく、私は天使に、それを私から取り去ってくださるよう懇願した。私は、神の大義のために彼らの財産の一部が求められると、イエスのもとに来た若者のように〔マタイ19:16-22.〕彼らが悲しみながら去っていくこと、そしてやがて押し寄せる災いが通り過ぎて彼らの持ち物をことごとく一掃してしまい、そのときには地上の富をささげて天に宝を積むには遅すぎることを見た。

そのとき私は、栄光に満ち、麗しく愛らしい贖い主を見た。彼は天の栄光の御国を離れ、暗く孤独なこの世に来られ、尊い命をささげて死なれた——義なる方が不義なる者のために、彼は残酷な嘲りと鞭打ちに耐え、編まれた茨の冠をかぶり、園で大粒の血の汗を流された。その身には全世界の罪の重荷がのしかかっていた。御使いが「何のために？」と尋ねた。ああ、私はそれが私たちのためであると見て悟った。私たちの罪のゆえに、彼はこのすべての苦しみを受け、尊い血によって私たちを神に贖い戻すためであった。

するとまた、滅びゆく魂を救うために彼らに真理を届けることによってであっても、この世の財を投げようとしないうちが、私の前に示された。イエスは彼らのために御父の御前に立ち、ご自身の血と苦難と死をもって執り成しておられ、また、彼らが生ける神の印で封印されるよう、その救いの真理を携えて彼らのもとへ赴く用意を整えた神の使者たちが待っているというのに、現在の真理を信じると公言する者の中には、神が管理させるために彼らに貸しておられる神ご自身の金を、使者たちに手渡すという、ほんのわずかなことさえ、なかなかできない者がいた。

すると、苦しむイエス、すなわち彼らのためにいのちをささげるほどに深いその犠牲と愛が、再び私の前に示された。ついで、彼の従う者であると公言し、この世の富を持ちながら、救いの大義を助けることを非常に大きなことだと考えている人々の生涯も示された。御使いが言った、「そのような者が天に入ることができるのか。」別の御使いが答えた、「いいえ、決して、決して、決して、地上で神の大義に関心のない者は、天で贖いの愛の歌を歌うことは決してない。」

私は、神が地上で行っておられる速やかな御業が、義においてまもなく終わりにされ、散らされた群れを探し出すために、迅速な使者たちは道を急がねばならないのを見た。天使は言った。「みな使者なのか？」

いや、いや、神の使者には伝えるべきメッセージがある。」

私は、神からのメッセージを持たずに巡り歩く者たちによって、神の働きが妨げられ、辱められているのを見た。そのような者たちは、行く義務のない所へ旅するために費やした一ドル一ドルについて、神に申し開きをしなければならない。というのも、その金は神の働きを進める助けとなり得たからであり、その不足のゆえに、霊的な食物を欠いて魂が飢え、死んでいったからである。本来なら、資金さえあれば、神に召され選ばれた使者たちによって彼らに与えられたはずの霊的な食物であったのに。

激しい揺さぶりが始まり、これからも続くだろう。真理のために堅く不屈に立ち、神とその大義のために犠牲を払う覚悟のない者は、皆ふるい落とされるだろう。天使は言った。「誰かが犠牲を強いられると思うのか。いいえ、いいえ。それは自発的なささげ物でなければならない。畑を買うには持てるすべてを要するのだ。」-私は神に叫び、彼の民をお救いくださるよう願った。彼らの中には気絶しかけ、死にかけている者もいた。

私は、手を使って働く力があり、その大義を支える助けとなりうる者は、その力について、他の者が自分の財産について負っているのと同じだけの責任を負っているのだと見た。

そのとき私は、全能の神のさばきが速やかに臨もうとしているのを見た。私は天使に、天使自身の言語で人々に語ってくれるよう懇願した。すると彼は言った。「神の言葉の明白な真理によっても動かされない者たちは、シナイ山のすべての雷鳴と稲光でも動かされはしない。天使の使信でさえ、彼らを目覚めさせることはできない。」

レビュー・アンド・ヘラルド、1850年4月1日。